

令和7年度 江戸川区立船堀幼稚園 学校関係者評価報告書（学校経営計画・学校関係者評価シート）

学校教育目標	心も体も健康な船堀の子どもを育てるために次の目標を設定する。・元気な子ども（健康な心と体を育てる）・明るい子ども（自発性や主体性を育てる）・考える子ども（思考力や創造力を育てる）・思いやりのある子ども（社会性や豊かな心を育てる）		目指す学校像 目指す生徒像 目指す教師像	○足育・心育・遊育・食育・共育を目指す幼稚園 ○心も体も健康な子ども ○質の高い幼児教育を実践し、自ら学び続け、教員力を高める努力をする教師
前年度までの本校の現状	成果	○遊びや活動に主体的に取り組むことで自分の力を発揮し、自己肯定感を育むことができた。 ○教職員が連携し個々に合わせた援助や視覚的教材の工夫等を実践した。	課題	○幼児の実態に合わせ、主体的に遊びに取り組む環境構成や教材研究のさらなる工夫と指導計画の改善に取り組む。 ○一人一人の幼児に応じた教材の提示など職員で情報共有し、指導力向上につなげる。

重点	取組項目	具体的な取組内容	数値目標	達成度		「中間」自己（学校）評価(A~D)		「中間」学校関係者評価(A~D)		「年度末」自己（学校）評価(A~D)		「年度末」学校関係者評価(A~D)		次年度に向けた改善案
				9月	2月	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	評価	コメント	
学力向上	○遊育の推進	発達や時期に応じた教材、環境構成の工夫や、教師の援助や指導	幼児の遊びを充実させる指導の工夫と指導力の向上を目指す	B	B	B	時期に応じた環境構成の工夫、幼児の実態に応じた指導の工夫が見られた。			B	幼児の興味関心、時期、発達に応じた教材提示や環境構成により、思考しながら遊びに取り組めた。	B	幼児一人一人に配慮した保育で職員間の連携がなされていることがわかる。	職員間で取り組みや成果を分かりやすく共有し、幼児が安心して過ごせる環境作りを目指す。
	○心育の充実	様々な活動に興味関心を持ち、挑戦するたくましさ、しなやかさ、思いやりをもった子どもの育成	幼児の思考力の向上と、自己肯定感を育む指導の実践の推進	C	B	C	さまざまな遊びや活動に意欲的に取り組むが、思うようにならないと諦める、友達の思いに気づかない幼児もいる。			B	友達に思いや考えを伝えたり相手の思いを受け止められる援助を繰り返した。思いやりの気持ちが育ってきた。	B	幼児に合わせた指導、教育をしていると感じる。やりたいことを自分で選択して活動できるところもいい。	相手の気持ちを気付く、受け止める、共に考える援助、配慮を続ける。
	○絵本に親しむ活動の推進	毎日絵本や紙芝居などに触れる。学期ごとのお話会の実施	絵本や紙芝居等を日々取り入れ、想像力を育む教育の実践を図る	B	B	B	季節に応じたお話との出会いの楽しさを感じる幼児の姿が見られる。			B	時期に応じた内容、昔話、図鑑といったさまざまなジャンルのお話に出会う楽しさを味わえた。	B	特になし	絵本の整備や教材研究などさらに推進する。
体力向上	○体を動かす遊びの充実	意欲的に体を動かすための多様な運動遊びの充実、足育の推進	園内研究や研修会を通して学びを深め、指導の実践を図る	B	B	B	実態に応じた運動遊びの指導を行うとともに、研修会で教材研究を実施した。			B	研究会の指導から、運動遊びをさらに工夫し、幼児自ら進んで取り組む楽しさを味わえる実技の実践ができた。	B	特になし	幼児の思考力を伸ばした運動遊びに実践を取り入れる。
	○食育の推進	給食や野菜の栽培、収穫、会食	給食指導や野菜の会食を通して、食への関心を高める指導の工夫を行う	B	B	B	栽培物の会食で食べることへの関心を深める姿がみられる。			B	給食や園内の栽培物の会食から、さまざまな食材と出会い、食し、食への関心が高まった。	B	様々な果実や野菜に触れる機会が園内でできるのは、幼児の興味関心もとても良い。	栄養の要素や体に取り入れることの大切さなど、食に関する知識をわかりやすく指導する。
実現に向けた共生社会の推進	○特別支援教育の推進	個々の幼児の特性、発達に応じた支援の充実	視覚教材や表示の活用、環境改善を図る	C	B	C	支援が必要な幼児が多く、個別対応の難しさがある。			B	介助員と教職員で連携し、援助を繰り返したことで、幼児の安定や成長につながった。	B	行事を参観すると職員が子どもたちのために連携をとりながら一生懸命関わっている様子が見られる。	個別に支援を要する幼児に対する援助の方法の情報共有を引き続き行う
	○全教職員と専門機関との連携	幼児の実態に合わせた指導の共通理解 専門機関との内容の共有	幼児に関わる全教職員と情報共有し、指導力向上を図る	B	B	B	専門家チームによる研修や日々の情報共有が指導力の向上につながっている。			B	専門家チームでの助言や療育施設との連携により、その幼児への援助の具体的な支援を学び保育にいかすことができた。	B	幼児の特性や性格を先生方が共有したり、保護者の皆様も受け入れ見守ってくれて園に入れて良かったと心から思う。	療育を専門とする施設、機関とのさらなる連携を図る。
不登校・いじめ対応	○教育相談の充実、共育の推進	降園時や面談などの個別相談やSSW、健サボなどの専門機関との連携	保護者に寄り添い、家庭支援に配慮し対応力を高める	C	C	B	さまざまな療育機関の訪問事業を受け入れ、支援の具体的な方法の連携を図っている。			B	担任や管理職が個別に面談をしたり、SSWと連携したりして保護者の不安や相談を受け止め、支援をしたが難しさがあった。	B	特になし	多様化する保護者の対応を、区の専門機関と連携して解決できる対応をすすめる。
	○欠席の多い幼児への対応	欠席児への連絡や家庭状況を配慮した個別対応の実施	家事都合による欠席児の減少を目指す	B	C	B	個別に声がけをしたり、配慮したりすることで、家事都合による欠席の減少がみられる。			B	家庭や保護者の状況を見極め、直接電話をして、幼児の様子を伝えたり登園を促したりして改善した。	C	多様化した幼児がいる現在、保護者の心の安定を図ることは大変難しい。	教職員がチームで協力して改善に取り組む。

